様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ５ 月　 ７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2020～2024
課題番号：２０Ｋ２０８２５

研究課題名（和文）留学はいつまで越境か；学生モビリティの将来に関する探索的研究

研究課題名（英文）Until when intrernational student education requires cross boarder mobilities; Prqactical investigations for future of mobility programs

研究代表者
近藤　佐知彦（Kondo, Sachihiko）

大阪大学・国際教育交流センター・教授

研究者番号：７０３３５３９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,700,000円

研究成果の概要（和文）：ＡＲ（仮想現実）やＥＲ（拡張現実）に焦点を当て、将来にわたって留学というまなびがどのように変質する可能性があるかを研究の出発点であった。しかし世界的な感染症流行によって国境管理が厳格化したことで、実留学代替手段としての「仮想留学」が急速に普及した。実際に研究に入る時点で多少焦点を変化させ、オンラインのコミュニケーションが実生活の重要な部分として不可分になっているなか、現実の留学交流が「どの程度の異文化没入状況になっているのか」を明らかにする研究に取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義
まなびの仮想化に対し、日本、中国、英国（連合王国）の教員ディスコースの比較を行い、教員サイドからは仮想化が「進化した教え方」として比較的好意的に受け止められていることを明らかにした。もちろんそれぞれの国で文化的な差異はあるものの、「進化発展」の方向性でポジティブに受け止められている。一方、学生の側では、留学とはトータルの没入経験でありたいという思いを持ちつつも、オンラインで母語文化に頼ってしまう学習方法に若干の罪悪感を覚えていた。教育の供給側と需要側で「教育仮想化」の価値や必要性についてミスマッチがある。

研究成果の概要（英文）：Focusing on AR (artificial reality) and ER (extended reality), the starting point of this research was how the practice of studying abroad might be transformed in the future. However, the tightening of border controls due to the global outbreak of infectious diseases has led to the rapid progress of “virtual study abroad”style programs as a realistic and practical alternative to real study abroad program. The focus changed somewhat when the research actually began, and the study sought to clarify “the degree of cross-cultural immersion” into real-life study abroad interactions as online communication became an inseparable part of real life, especially for Generation Z students.

研究分野：留学生教育

キーワード：留学生教育　教育仮想化　オンライン教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

想像力を駆使すれば；

◇ 世界中の 20 歳の大学生が一堂に会して SDGs について議論するワークショップ

◇ 中世英国文学を当時のカレッジ環境で各国の留学生とイマージョン学習

◇ 架空課題解決留学（例えば「ナルニア国」で異種動物間共通言語を共同提案）

……といった「未来留学（Future Mobility）」までが新たな「留学のオプション」に加えられる日が来るかもしれない。以上のような想定から本研究を発想した。

５G が普及しだして、PC のウェアラブルかが視野に入り出した時代に、技術的、制度的なブレークスルーを前提とするわけだが、そもそも「留学というまなび」の本質を再確認しなければならない。

その一方、感染症の拡大に伴い、国境を越えた留学はおろか、キャンパスへの通学すら叶わないロックダウン事態となり、授業のオンライン化仮想化が一気に普及する。同時に越境が出来ない状況では旧来の「留学」はほぼストップし、それに対する代替措置として、COIL なども含めた仮想留学が一気に普及した。その後感染症の終熄に伴って、一時的な「反動」を見せたあと、おおむね越境を伴う留学の規模は旧に復しており、ふたたび「留学とは越境」という社会的認知が戻った。ただし「留学というまなび」の本質を問う作業はなおざりにされたままだ。

代替策としての仮想化が議論される状況を脱し、また当初に構想した「未来留学」スタイルだけにこだわるわけでもなく、どのように研究を組み立てるべきかを模索してきた。

往事の通念として大学生の留学とは海外での学位取得だった。修了者には学位（資格）に見合った学術能力と、それを可能にした異文化コンピテンシーが備わったと考えられた。今では学位取得に加えて交換留学や認定留学も大学生留学の選択肢に入り、サマースクールなどへの参加者も多い。日本学生支援機構による「協定留学」の定義では８日間の渡航でも留学である。また学位取得に伴う副産物と見做されていた個別的異文化経験も広く留学の概念に含まれる。日本の「トビタテ!留学 JAPAN」や豪州の「新コロンボプラン」では、インターンなどキャンパス内外での実践活動が奨学金給付の条件とされる。学術知識の獲得だけでなく、越境という Away 体験によって異文化コンピテンシーが養われる、という期待が根底にある。LCC の登場やエラスムスなどの政治イニシアティブも大学生の越境を容易にした。大学生に関しては、かつてのエリート育成型長期留学から、短期で多様なニーズに応える大衆留学が社会に受容・奨励されるようになった。今後の ICT や AI の発展に伴い、留学生教育関係者が想像したこともない社会が開ける予感がある。現在のレベルを超えた次世代 ICT の時代には、越境を大前提とする「留学イコール越境」というパラダイムまでもが大きく転換される可能性はないだろうか。

２．研究の目的

Z 世代にとってスマートフォンが生活必需品になるにつれ、仮想空間では既に「人間関係」も「まなび」も軽々と国境を越えた。身体が異国にあったとしても「故国と常時繋がっている現代の大学生」にとっての留学体験は、プレ・スマホ時代のそれと同質であるとも思えない。

対戦型ゲームの一部は e-sports となり、競技として社会的認知を受けつつある。留学についてはどうだろう。次世代 ICT の時代には、越境を大前提とする「留学イコール越境」というパラダイムが大きく転換される可能性はないだろうか。

留学による越境は心理的・物理的に Away であるとともに、個別的状況依存的でかけがえのない異文化没入体験と見做されてきた。一方 Virtual なら「かけがえのなさ」は薄いものの、費用対効果や再現性が高く、大衆化にも馴染むのは確かであると考えられた。

世界的な感染症の流行は、国内の移動や学校への通学と言った日常までも変化させ、国境が実質的に閉ざされる事態を招いた。初期の研究の制約としては、このような中で海外での先進的な ICT 技術展への出席などが叶わず、おおむねバーチャルでの参加を余儀なくされたことである。もともと ICT 専門家ではない研究代表者には、最新技術等の見極めが困難になった。その一方で、活発に進んでいた留学交流による教育では、「移動・越境代替としての virtual 移動」オプションが現実的な妥協策として、大学関係者や学生に受け入れられるに至った。また、その時の学校、学生双方にとって、自国や自校のキャンパスへのアクセスも制限される中で virtual 以外の選択肢はなかった。そのような中で、そもそもの「留学というまなび」の本質とは何か、という問題点については、周縁的な課題として、等閑に付されたままになっている。様々な制約の中で試行錯誤を重ねたが、その部分を明らかにして行くことを本研究の目的に定めた。

３．研究の方法

まず代表者は英連合王国や中国の研究者と連携して、それぞれの国で教員が virtual な教育に対してどのような意味づけを行っているのかを比較した。これは留学に限らず、まなびの仮想化に対して、特に教員側による意味づけの詳細を明らかにした初期の国際比較となる。

次に分担者を得て、日本国内の留学生、特に中国人の言語学習者や実技を学ぶ留学生へのアンケートを通じ、実技実習を伴う「人間関係（師弟関係）を大きな柱として」まなびを続けている

「越境留学生」が、オンラインで母文化・母語コミュニティとつながっている実態と、その「つながりの重要性」をどの程度感じているのかという点について調査に取り組んだ。
「越境が復活した世界」において、越境を伴う留学は新たな価値を保持しうるのか、仮想的な移動は「越境が復活した世界」においても、「越境留学」を凌ぐ積極的な意味を持ちうるのか、そういった問いへ探索に取り組んだ。

４．研究成果

本研究は教育の提供者（教員）と受容者（学生）の双方からの見方を探る必要があると考えた。

前半期には、まず英国、中国の研究者と共同し、ディスコース研究の手法を用い、それぞれの国でコロナ禍中のまなびの仮想移行が教員達にどのように概念化されているかについて比較研究を行った(Murakami. K, Kondo, S.and Hong, J. 2022)。手法としては、ディスコース心理学のアプローチを用いる教師インタビューの分析である。

いずれの国もパンデミック期には急速な教育の仮想化が進み、提供者側の教員にとっては教育の提供方法を大変化させるため､大きなストレスがかかっていた｡インタビューを分析すると、各国の教員が急速な教育の仮想化シフトについて「幸福×不幸」「肯定×否定」「受容×排斥」「積極的×消極的」など様々な社会認識の軸にしたがって、社会的現実のマッピングを行っているのだが、英国と中国では「先進×旧弊」といったディスコースで、急速に齎された変化への対応能力を持って「先進の証」として受容を肯定するような議論が見られた｡なかでも中国では政府(党)の指導への即応体制、積極的な採り入れをもって先進の証明とする論法が特徴的であった｡その一方、日本では教育仮想化を比較的単純に「先進的」と捉えるだけでなく、その裏にある世代間のテクノロジー受容の差異として社会構築されていた｡いずれのインタビューにおいても、実地と仮想がブレンドした教育法が求められているという結論に至るのだが、そこに至る過程において、それぞれの教員の置かれた社会・文化的な差異が色濃く表れていた。

英国: 英国の教員は、仮想教育の急速な導入については「教育の先進化」と捉え、積極的に受け入れる姿勢を示した。

中国: 中国の教員は、政府の指導に即応する形で仮想教育を「先進の証」「社会貢献」として受容した。

日本: 日本の教員は、仮想教育を世代間のテクノロジー受容の差異として捉え、社会発展の一側面として認識した。

後半期においては、分担者を中心に①「日本に留学している中国人留学生がどの程度母語メディア（ネット）に依存しているのか」（工藤 2022)、②「ホスト文化を学ぶ留学生（日本料理やマーシャルアーツ等の実技･実習)がどの程度母語メディアに依存しているのか」(工藤 2025）の複数の調査を行った。いずれの調査においても、留学生達は母語メディア（SNS 等へのアクセス）への依存を自覚しており、同時にそれについて若干の罪悪感を抱いていた。これらの調査からうかがえることは、生徒の立場では「留学とは越境で 100%の異文化没入」であり、実際にはそのような留学経験をしている Z 世代学生は存在しないものの「全面的な没入経験」が留学の本質とされていることが判った｡つまり古典的なモデルの留学の極端な理想化が、留学の本質として認識されている｡このような①②のアウトカムについては､インドの国際会議（Kudo and Kondo; 2025）で発表を行い、関係者と問題意識を共有した。

なお、古典的な「実留学モデル」が理想化される理由の一解釈として、代表者の見解として、最近の学術研究では見落とされがちな視点であるが、留学交流の大きな着眼点は外交であるべきであり、その機能を発揮するためには仮想移動ではなく、実移動が必要とされる、という見方も発表している（Kondo, Sengoku and Nakano, 2024)。

Murakami, K., Kondo, S. and Hong, J.（2022）Teachers' Ideological Dilemmas During the Pandemic at Higher Education Institutions: a Discursive Psychological Approach *Human Arenas* (7):907–930

工藤昭子 (2022) 「滞日中国人留学生のインターネット利用に関する研究ーPilot Study アンケート調査より－」国際武道大学紀要 (37) 69-78

工藤昭子 (2025)「文化的依存度の高い学びを専攻する滞日外国人留学生の母語ネット接続意識：対面留学 vs オンライン留学に対する考え」国際武道大学紀要 (40) 39-50

Kudo, A. and Kondo, S.（2025）Indispensable part of mobility programs @APAIE2025 Annual Conference and Exhibition (Asia-Pacific Association for International Education)

Kondo, S. Sengoku, Y and Nakano, R. 'Future of the International Student Education', in S. Kondo, Y. Sengoku, R. Nakano and A. Okada (eds.) (2024) International Student Mobility in Japan; Higher Education in the Era of the New Normal, London Roultege.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 近藤佐知彦	４．巻 27
２．論文標題 交換留学の三原則 : 新常態での大学間交流に向けての一考察	５．発行年 2023年
３．雑誌名 多文化社会と留学生交流	６．最初と最後の頁 79-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Murakami Kyoko、Kondo Sachihiko、Hong Jianzhong	４．巻 -
２．論文標題 Teachers’ Ideological Dilemmas During the Pandemic at Higher Education Institutions: a Discursive Psychological Approach	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Human Arenas	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s42087-022-00292-9	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 工藤昭子	４．巻 37
２．論文標題 滞日中国人留学生のインターネット利用に関する研究ーPilot Studyアンケート調査よりー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国際武道大学紀要	６．最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤 佐知彦	４．巻 8
２．論文標題 新型感染症と留学生のホームステイ（コロナ期の草の根国際交流）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 グローバル人材育成教育研究	６．最初と最後の頁 77～83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34528/jagce.8.1_77	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 工藤昭子	４．巻 40
２．論文標題 文化的依存度の高い学びを専攻する滞日外国人留学生の母語ネット接続意識：対面留学vsオンライン留学に対する考え	５．発行年 2025年
３．雑誌名 国際武道大学紀要	６．最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Sachihiko KONDO and Akiko Kudo
２．発表標題 Are Students Studying Abroad Staying Abroad? - Generation Z International Students' Dependency on Own Virtual Platforms-
３．学会等名 NAFSA 2022 Annual Conference & Expo　Poster session（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 工藤昭子
２．発表標題 滞日中国人留学生のインターネットを使用した被支援志向性ーソーシャルサポートと適応の観点からー
３．学会等名 第43回異文化間教育学会ポスター発表
４．発表年 2022年

１．発表者名 Sachihiko KONDO, Akito OKADA and Yu SENGOKU
２．発表標題 Insight into Japanese HEIs; Notions of DecisionMakings to Facilitate Post-Pandemic Mobility
３．学会等名 2022 AIEA（Association of International Education Administrators） Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Akiko KUDO, Sachihiko KONDO and Yu SENGOKU
２．発表標題 Concurrent Session: Digital Platforms, Future Mobility and the Prospects for HEIs
３．学会等名 2022 APAIE (Asia-Pacific Association of International Education) Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 近藤佐知彦
２．発表標題 新型感染症下のホームステイ;コロ ナ期・ポストコロナ期の草の根国際交流
３．学会等名 留学生教育学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	工藤　昭子 (KUDO Akiko) (70781847)	国際武道大学・体育学部・准教授 (32509)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関